

愛知用水事業を顧みて

はじめに

山田光敏

私は、昭和二十四年から既に在職中の農林省に於いて、愛知用水の計画づくりに参加し、ひきつづき昭和三十年に新設された愛知用水公団に出向し、約四年余りの在職の後、昭和三十四年農林省に復帰するまでの延べ約十年の間、愛知用水事業に参画した。

愛知用水は昭和三十六年通水を開始して以来今日まで、四十余年に亘り一日たりとも断水することも無く、毎秒約三十立方メートルの大量で良質の木曾川の水を流し続け、地域住民の生活や、文化レベルの向上は勿論、中京地域の工業発展に寄与していることは御承知の通りである。しかしこの間、通水開始後の急激な社会経済状況の変化に伴い、農業用水中

心から上水・工業用水中心へと水需要が大きく変化した。この水管理のため昭和五十六年度より幹線水路の大々的な改修のための愛知用水第二期事業を目下実施中である。

私は昭和三十四年に名古屋を去り、以後十年振りの昭和四十四年より、愛知池近くの現在地に居住し、親しく地域市民の皆さんと接しているが、この世紀の大事業であつた愛知用水の存在にも、木曾川の清く豊かな水の有難さも、残念ながら市民の脳裏から次第に忘れ去られようとしている。第二期事業が間もなく完了しようとしている今日、市民と愛知用水との関係はこのままで良いのであろうか。

申すまでも無く、この用水は「貴重な水資源」としてのみでなく、自然環境重視の現在の社会・市民感覚の中で、愛知用水を貴重な水辺環境としての活用に、熱い視線を投げ掛けている市民が多いことも事実である。

この時にあたり、市民の皆さんに、愛知用水の生い立ちから現在に至るまでの経緯やその役割について、私の体験を通じ少しでもお知らせすることにより、愛知用水に対する理解を深められるとともに、市民参加の一助となれば幸いである。

用水運動の胎動

終戦間もなくの頃、東京では、焦土復興がようやく軌道に乗りかかつてはいたが、労働者のデモや、外地よりの引揚者や復員軍人でごった返していた。昭和二十三年の暮も押し迫った十二月二十二日、当時の国電有楽町駅と日比谷公園前のマッカーサー司令部（GHQ）との中ほどにあった農林省開拓局長室に、大勢の農民の陳情団が詰めかけていた。

列席者は、当局よりは当時の局長、伊藤佐（愛知県知多郡豊明町出身、後の初代愛知用水土地改良区理事長）、担当課長、清野保（後の愛知用水公団副理事長）。陳情団側は知多郡篤農家で、この運動の中心的存在であり続けた久野庄太郎、技術面で久野を助けた半田農学校教諭の浜島辰雄（豊明町出身）その他であった。その席上、伊藤局長は陳情団に対し、この運動を積極的に支援する旨の確約を与えた。

引き続き陳情団一行は、関係官庁や吉田総理にも面接し、総理からは逆に激励を受けた。これに自信を得た彼らはその後、活発な用水運動を展開することとなる。

私は、昭和二十一年より社会人一年生として、たまたま前記清野課長の下で一技術者として、国の開拓業務に携わっていたのであるが、以来数名の仲間と共に愛知用水計画に参画することとなった。このことがその後の私の人生に大きな影響を及ぼすことになるう

とは、その時の私には全く思いもよらなかった。

「知多地方に水が欲しい」という農民の切実な叫びは明治時代以前からあった。この地方は特に戦前、戦後に度重なる旱魃被害を受けていたし、一方政府は、戦後の危機的な食糧難に対処するため大々的な食糧増産計画の策定に直面していた。前記久野、浜島を中心とした地元有志による用水運動が開始されたのが、昭和二十三年五月で、県農地部の支援も得て知多農村同士会を結成、農民大会が開催され、上記の陳情となったのであった。

この運動を開始して最初の大きな課題は、如何にして農民達の賛同と団結を得るか、及び木曾川よりの取水に対する下流の水利権者の同意（河川協議）を得るかであった。

そこで久野たちはこの用水事業の理念として、「愛知用水は真に農民のものとして、農民の自覚と団結による民主的な総力を結集して実現する」とともに「この用水は単に農民の用水を流すだけのものではなく、この地域に新しい文化を育むための用水でなくてはならない」と考えた。そうしてこの事業は、農業、発電、上水道、工業用水、観光等、木曾川流域総合開発の一環としてとらえた我国最初の試みとなった。

こうした用水開発の理念と構想のもと、その後には発足する期成同盟会が中心となって、

地元農民団体や関係方面に対し、日夜涙ぐましい訴えが展開された。しかし、この運動によつて多大の資産を失つた久野は、遂に破産宣告を受ける羽目となつたのである。

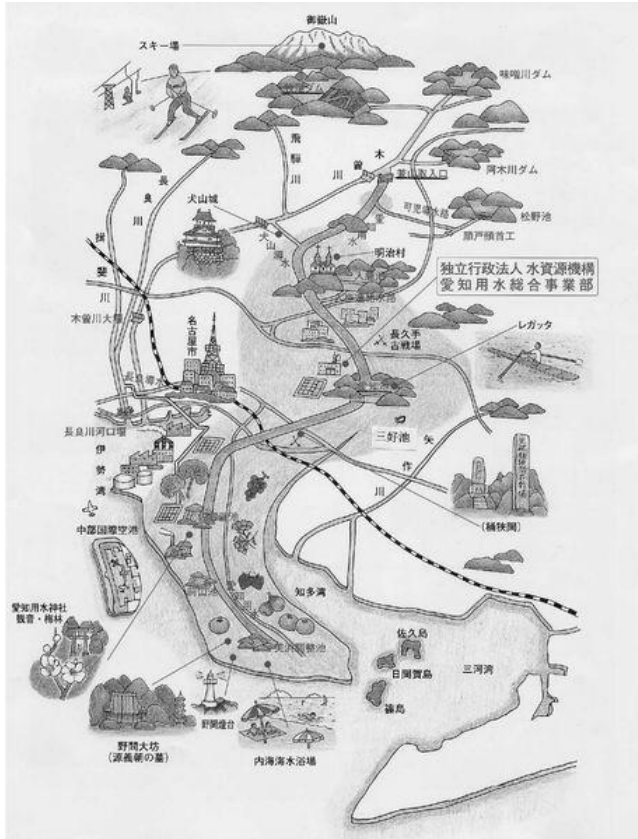
彼等のこうした努力の結果、昭和二十六年農林省直轄の「木曾川水系総合調査事務所」が開設され、それにあわせ愛知県（桑原知事）も積極的な予算を計上することとなる。

以上に述べた開発理念や構想は、当時の半田市長森 信蔵（当時期成同盟会会長）の存在に負うところが大きかつた。同氏はこれまで三十年余、アメリカで記者生活を送り同国の土木事情の情報に精通していた。太平洋戦争の直前一九四〇に完成したコロラド河上流総合開発事業T・V・A（地域面積は我国本州に匹敵）の構想が、幸いにも彼により紹介されたことが、この運動を成功に導いた大きな要因の一つとなつたことを強調しておきたい。（末尾の別添参考資料1「T・V・Aの概要」 頁参照）

愛知用水の当初計画

昭和三十年事業発足時、農林省が公団に示した事業実施基本計画の概要は次の如し。
木曾川総合開発計画での河川協議の結果、兼山取水地点の木曾川の余剰水として、自流毎
秒三百トン以上の場合が取水可能となり、不足分は牧尾ダムの貯留水を放流して取水する。
そのため木曾川支流王滝川（木曾福島市地点）の牧尾橋地点にダムを新設し、この放流水
と上記の兼山での木曾川の余剰水を取水し、知多半島師崎地先まで導水する。

- ・ 最大取水量… 毎秒三十立方米
- ・ 牧尾ダム… 高さ 九〇米… 総貯水量… 一〇三百万立方米（愛知池の約十二倍）
- ・ 兼山から師崎までの幹線水路延長… 一一五キロ米… 支線水路延長約一〇〇〇余キロ米
- 灌漑面積… 三万三千町歩
- ・ 供給水量… 農業 一四〇百万立方米（愛知池の約十六倍） 上水道 千七百万立方米
（給水人口約三十万人）工業用水 二千八百万立方米
- ・ 発電 … 牧尾ダム直下発電所新設 下流発電所増強
- ・ 工事期間… 昭和三十年～昭和三十五年（一九五五～一九六〇）
- ・ 所要資金… 約三百億円



愛知用水イラストマップ

資金計画と世界銀行

愛知用水事業は、農業、上・工水の都市用水、発電等を目的とした総合開発で、事業主体も国、(農林省、厚生省) 愛知県(農地、水道各部)、関西電力、市町村等に分かれ、資金も三百億円と莫大なものであつて、これを五ヶ年の短期間で完成するには、当時の国家予算(昭和三十年一般会計予算約一兆円)では到底困難であつた。

そこで公団を新設し、公団がこの資金を一括管理し、これを上記各事業主体に貸し与え、各事業の同時完成を計画した。資金は世界銀行の借款と当時の余剰農産物の見返り資金(年利四歩二十五年償還)によるべく世銀と交渉を行った。

この公団方式の事業は我国では初めてであつたが、結果として見事に成功し、予定通り完成したことは、現在から見ても画期的なことであつた。

公団発足と外国コンサルタント

昭和三十年十月十日、ようやく公団が発足した。私は本省の十名前後の先輩、後輩達と公団出向を命じられ、虎の門の新東京事務所にワクワクした気持ちで初出勤した。この日は秋晴れの素晴らしい日であった。

名古屋本社の準備をまっけて、私たちは翌三十一年四月、仲間と二人分の家財道具の積荷は、四トントラックがガラガラの状態で、八事に新設された梅園住宅（二軒長屋の二階建て二LDK）に入居した。東京での八畳一間の官舎住まいから開放されたことを思い出す。

最初事務所は、東片端町の仮庁舎であったが間もなく現在の二の丸庁舎に引っ越した。やがて全国より続々と職員が採用され、その受け入れのため各地に職員住宅を建設した。そのため、当時のマスコミからは住宅公団の異名を受けたこともあった。

また一方では、世銀借款契約に基づくE・F・A社（シカゴに本社を有するコンサルタント会社）の技術者が続々着任してきた。その数十数名、夫々五十歳台の経験豊富な誠にしたのもしそうなエンジニアばかりで、私達は期待と緊張を持って彼らを迎えた。

今でもはっきり覚えているのが総支配人のリブナーさん、最も若く私より幾つか年長で、ダム担当で土質関係専門のラングフォードさん、タイピストで唯一人女性のハイエットさん等。

私の配属はEFA課。この課は、技術的課題に対する公団とEFAとの交渉窓口で、私の担当は水源事業（牧尾ダム、愛知池ダムや三好池、岐阜県松野池）であった。

今でこそコンサルタントという言葉は巷に溢れているが、当時では全く珍しく、新鮮に聞こえた。実際に彼等とつきあつて実感したことは、彼等の現場経験に基づく自信、技術力やテキパキと仕事を処理する態度はさすがであった。更に、やがて始まる輸入大型土木機械を駆使した機械化施工等、このときのコンサルタントという職業に対する経験、感動がその後の私の人生に大きな影響を与えた。

公団は発足以来二ヶ年の準備期間を経て、三十二年十一月いよいよ三好池が着工、三十年六月、難航を極めていた牧尾ダム水没補償交渉がやっと妥結し、同時にダム本体工事に着工、翌三十四年十月東郷調整地（愛知池）もようやく着工の見透しがたち、既に着工していた幹線水路や支線水路工事とあわせ、やっとこれで全面着工となった。

この年の九月、伊勢湾台風の襲来を受けたが、幸い工事にはたいした支障はなかった。こうしたとき、私は思いがけなく三十四年十二月、農林省に復帰を命ぜられ四年余りの

名古屋生活から、間もなく事業開始される四国の第二の愛知用水とも称される総合開発事業、仁淀川上流の面河ダム工事の責任者として赴任した。本省、公団時代を通じ、私の少壮技術者時代の約十年を愛知用水と共に過ごせたことは、誠に楽しく幸な時期であった。

三十六年五月牧尾ダムは竣工し、同三十六年九月三十日兼山取水工より通水が開始された。大型土木機械を駆使し、内外技術の総力を結集した我国最初の大規模総合開発事業は、予定通りの五年の工期(実質三年半)で完成という先駆的記念碑を打ち立てたのである。

第二期事業の開始（昭和五十六年）

三十六年九月通水開始、この三年後の三十九年十月一日東海道新幹線開通、同年十月十日東京オリンピック開催等、この頃より我国の高度経済成長の足音はだんだんと高まってきた。その間愛知用水受益地内では、豊かな水資源の高度利用を求めて、当初の計画を遥かに超える水需要となり、その中身も変化を余儀なくされた。一方、幹線水路周辺の都市

化による環境の変化は施設の弱体化に拍車をかけることとなった。

即ち、通水後二十年経過し、広大な畑地灌漑予定地や、水田の一部は宅地化や都市化され、また一方で離農者も増えはじめ、当初予定していた三万三千町歩の受益農地は約一万五千町歩に半減した。

また当初毎秒一・七トンの上・工水用の水需要が十三・三トンにふくれあがった。都市用水が増えると農業用水主体とは違って、水路補修のための断水が許されない。そのうえ都市化により水路周辺の環境が悪くなり、水路の老朽化が進んできた。

そこで施設の増強、改善のための二期工事では、幹線は隔壁を設けた複線の水路構造とし、サイフォン、トンネル等は二連とした。また上・工水の需要増分の水源として、新たに築造した阿木川ダム、味噌川ダムよりの放流も認可された。かくして、二期工事は昭和五十六年に始まり二十余年を経て、今年平成十六年度をもって完成し、本格的通水となる。

愛知用水（二期）事業完成（平成十六年）にあたって

昭和三十六年以来、愛知用水は一日の休みもなく四十余年通水続け、この地域の開発を通じて愛知県の経済発展に予期以上の貢献をしている。(末尾の別添参考資料2 頁参照)

しかし残念ながら、今日では愛知用水の存在は、市民の脳裏から次第に薄くなり、国内有数の清く豊かなこの水の有難さも忘れ去られ、水道の蛇口をひねれば水が出るのはあたりまえの時代となった。

私は今一度、「知多に水を」と叫び続けた、あの先人達の気の遠くなるような努力と辛苦に想いを馳せ、またパキスタンやイラクにおいて水不足で苦しんでいる数多くの住民のことを知るにつけ、私達は愛知用水のこの水に深く感謝したいと思う。

現在多くの市民は愛知用水に無関心を装ってはいるが、心の片隅では、この地域唯一の水辺環境としての活用に熱い想いを抱き続けていることも事実である

このように市民が愛知用水から遠ざかっている原因の一つとして、公団はこれまでの長い工事の間、「水資源の安全通水」を最優先目標とし、水辺環境に対する地域市民のニーズに適切に対応する余裕がなかったのではないか。一方市民サイドも、これまでの慣例から、半ば諦めの気持ちで、遠慮がちに遠まきに、見守っていただけではなかったろうか。

水資源公団は、去年十月より独立行政法人「水資源機構」に衣替えしたばかりである。私達もこれを機会に市民と管理者が、今後より一層親密に連携し、共生・協働することにより、市民の貴重な環境財産として、また「市民と共に在る愛知用水」として、水辺環境の保全や市民ニーズの活用がひらかれ、ひいては水の安全通水も計られ、更には地域の活性化も期待出来るのではなからうか。

私達は現在、東郷、日進の市民その他有志で会合を重ね、水資源機構と市民との架橋のため、地域市町村行政をも交えて「グラウンドワーク愛知用水」の設立準備を進めている。

この組織を確立し、将来はグラウンドワーク活動で連携・協働した市民・NPO・行政・企業がネットワークを組織して、木曾川流域の水涵養の危機が叫ばれている今日、既にこの活動に取り組んでいるNPO法人「緑の挑戦者」と協力出来る日が一日も早いことを念願している。

あとがき

ここで、世紀の大事業といはれた愛知用水事業をふり返り、私の二つの感想を述べたい。その一つは、事業の成功のためには、人の和・地の利・時の利が必要と言われているが、愛知用水は、正にこのモデル事業と言えるのではないだろうか。

上は当時の吉田首相をはじめ、桑原愛知県知事や、地元各界や団体・有力者及び農民団体等を中心とする「人々の和」を見事に創りあげたことは既述の通り。戦後の食糧難による政府の食料増産計画や失業対策にマッチした「時の利」。眼前の水量豊かな木曾川存在と中京という「地の利」。この三つが相互に入り混じり刺激しあって成功に導いたものと思う。その二つは、農民主導による下意上達と、民主的に総意を結集したこの農民パワーが、行政当局を動かしたことである。

戦後の大プロジェクトは、中央集権による行政主導により企画された事業が殆どであったが、これに反し愛知用水は知多郡の少数の農民の祈りの中で生まれた。これが大きな農民運動となり、この運動が県や政府を動かし、世界銀行を動かす原動力となったもので、

正に住民主導による大プロジェクトといえる。

現在愛知県下では知事を先頭に、「NPOと行政との協働」の必要性が声高に叫ばれている。これは、従来の如く、行政によって市民が支配されるのではなく、NPO（市民・市民団体）が行政を動かすことであって、既に半世紀以前に農民達が実践し成功した愛知用水が、この協働のモデルといえるのではないだろうか。

今後私達は、愛知用水に対する「市民と水資源機構との協働」のために、市民として何が求められ、何をなすべきか、二期事業完成を迎えんとする今日、私達は、この先人達が見事に成し遂げた行政との協働の偉業に学びつつ、愛知用水とともに歩み続けたいと思う。

（平成十六年七月末日）

米国 T・V・A の概要（参考資料—1）

T・V・A というのはミシシッピー河上流テネッシーの流域を総合的に開発するために設立された公社で、対象地域は日本の本州に匹敵する広さ。洪水調節、発電、農業開発、上・工水、水運、等を総合的、一元的に開発した。日米戦争直前の1940年完成した米国でも有数の大プロジェクト。

この理念や構想が丁度、木曾川総合開発や愛知用水に結びつき、その後日本の河川総合開発のモデルとなった。

通水直後（昭和38年）と最近（平成13年）の用水利用状況（参考資料—2）

用水種別	昭和38年	平成13年	備考
水利用の実態 の変化	143 百万立方メートル	475 百万立方メートル	3.3 倍
農業用水	93 (65%)	119 (25%)	
都市用水	50 (35%)	356 (75%)	
農業生産高	255.7 億円	665.9 億円	果物と花きの 伸び大
上水道水の 利用状況	10 市 4 町 給水 人口約 20 万人	12 市 7 町 給水 人口約 120 万人	
工業用水 製造品出荷額	3、259 億円	5 市 1 町 76 事業 所 34,800 億円	愛知県は 13 年 連続県別日本 一